

# 社会的自我像をめぐる普遍性／特殊性の考察

——橋川文三が語る日本ロマン派の「煩悶」の論理——

Study of the Universality/Specialty Regarding the Social Self Image  
—the Logic of “Agony” in the Japan Romantic School Narrated by Bunzou Hashikawa—

山之城 有 美

Yumi YAMANOJOU

(人間社会研究科 現代社会論専攻 博士課程後期)

## 要 約

戦中の自身の原体験であった日本ロマン派を擁護すべく橋川文三（1922 – 83 年）は、個と社会の矛盾をめぐる社会的自我の問題が 1930 年代前後に顕在化した為に、心の拠り所の危機に晒された人々は日本ファシズムに積極的に回収されていったという形で、1930 年代前後の「煩悶」の普遍性に着目した歴史像を戦後に確立させた思想家である。

本研究は橋川が、初の本格的論考『日本浪漫派批判序説』（初出 1957 – 59 年）で語っていた日本ロマン派に内在する論理が、その後の諸作品でどの様に展開したのかを示す試みである。その際には、橋川の論理に保持されていた普遍性／特殊性の整合性に着目することで、橋川が戦後に現れた様々な状況主義的な社会潮流に関して一貫して批判する視座を持っていたことも示す。なお本研究では、橋川が近代主義やマルクス主義を意識していた時期をⅠ期（1957 年 – ）、国家主義を意識していた時期をⅡ期（1964 年 – ）と置く。

## [Abstract]

Even after the end of the Second World War, Bunzou Hashikawa defended the Japan Romantic School, which represented the typical Japanese wartime experience. He was also the thinker who historically interpreted the universality of “Agony” during the 1930s. In other words, he argued that people who were exposed to critical circumstances, but lacking emotions, were positively influenced by Japanese fascism during the 1930s, because they emphasized their own social selves over contradictions between individuals and society.

This study considers his logic regarding the Japan Romantic School by reflecting upon his first full-length study, “An Introduction to Criticisms of the Japan Romantic School” (first published 1957 – 59), as well as its development in his subsequent work. Furthermore, this examination demonstrates the consistency of his assertions, which criticized various society currents appearing during different situations in postwar Japan. His consistent interpretation is due to his logic of universality / specialty, from which he never deviated. This paper defines his first period (1957 – ) as the time during which he was conscious of Modernism and Marxism, and his second period (1964 – ) as the time of Nationalism.

## はじめに

戦中の自身の原体験であった日本ロマン派を擁護すべく橋川文三（1922 - 83 年）は、個と社会の矛盾をめぐる社会的自我の問題が 1930 年代前後に顕在化した為に、心の拠り所の危機に晒された人々は日本ファシズムに積極的に回収されていったという形で、1930 年代前後の「煩悶」の普遍性に着目した歴史像を戦後に確立させた思想家である。橋川は、近代社会を生きた人々の「生命の危機感」や「実存の不安」といった煩悶する心情をリアルな普遍的問題と捉えながら、心情レベルの問題が政治レベルの問題にまで連動していることを提示する視座を持っている<sup>1</sup>。その際に橋川は、1930 年代前後の社会的自我をめぐる人々の煩悶に寄り添いつつも、「社会」を日常的・硬直的に支配する国家秩序に回収されることなく、「各個人」が主体的に社会的自我を確立することに価値付けている。橋川の歴史像は、近代そのものの問題が 1930 年代前後に顕在化したという「普遍」的視座と同時に、各国・各地域・各人によってその現れ方は多様であったという「特殊」的視座を持ち合わせている為、現代を生きる私たちの様々な煩悶についても社会的自我をめぐる近代に端を発した問題として包括し得る射程を持っている<sup>2</sup>。

橋川は日本という「特殊」な土壤に関しては、(Ⅰ)江戸時代には、儒教的社会秩序の要素であった「自然」と「人為」との分離を本居宣長が試みることで社会的自我が芽生える契機が担保されていたが、(Ⅱ)近代国家成立後、個と社会の矛盾に関わる問題が顕在化してきた 1930 年代前後になると、人々は心の拠り所を「人為」と分離する契機が弱まっていた「自然」に求めるようになっていった、という歴史認識を持っている<sup>3</sup>。その為橋川は、「人為」に回収されずに社会的自我を守る為には、「自然」と「人為」という 2 つの価値を、①直結させて一色単に捉えないこと、②各価値を硬直的に実体視しないことが重要であると捉えているといえる。なお①に関しては日本の自然主義批判や国家主義批判などを、②に関しては日本のマルクス主義批判や近代主義批判などを、戦後を生きる橋川が念頭に置いて論じていたことが想定される。さらに橋川には、丸山眞男のいう「神の作為による自然」という概念では説明しきれなかった人々の主体性について、「自然」と「人為」の狭間で人々が心の拠り所を求める煩悶をしつつも、その煩悶のゆらぎの中から社会的自我を生み出していくというビジョンが認められる。その為橋川は『『自然』と『人為』の関係性そのもの』への独自スタンスを持つことで、煩悶する人々の心情を普遍的なものと理解し、かつ、各人が属する土壤によってその煩悶は特殊で多様な現れ方をすると捉える形で、普遍性／特殊性の整合付けを可能にしていたといえる。そしてこのことを通じて橋川は、戦後に現れた様々な状況主義的な社会潮流を一貫して批判する視座を保持していたと解釈出来る。

一方で橋川は、土着的なものに心の拠り所を求める人々の煩悶を普遍的視座で捉えているものの、「神との契約」が前提となって近代ヨーロッパ地域で生まれた「実存」という概念を、近代日本で人々が心の拠り所を求めて煩悶する状況を語る際にも適用している為、ヨーロッパと日本というそれぞれの地域の特殊性を混同する側面も持っていたといえる<sup>4</sup>。なお橋川は日本における社会的自我を論じる際に、「実存」という観念レベルの概念に価値付けしつつも、「実存」と対極にある概念として「官僚」という観念レベルと制度レベルを含んだ概念を示している特徴がある〔山之城 2014 : 85〕。これは橋川が、明治期以降の天皇制に基づく国家を「官僚」と表象す

る一方で、マルクス主義の革新的契機によって生まれた価値を「実存」と表象することで、その後の1930年代前後に顕在化した社会的自我をめぐる問題を「実存」と「官僚」をめぐる煩悶という構図の中で捉えていた為であると考えられる。橋川のこのような形で社会的自我へ高い関心を持つスタンスは、あくまで1930年代前後の日本の都市部に生きる人々に中心に浸透していたマルクス主義の影響を前提としたものであり、家父長制度が即物的に定着していた農村部においては社会的自我の契機は弱かったという状況を押さえる必要がある。つまり、革新的契機が強い都市部と弱い農村部との価値観の違いが存在したことで、①農村部の家父長制度になじめずに心の拠り所を求めて煩悶する青年達が、都市部に流入してマルクス主義に観念レベルでの希望を見出す動きや、②マルクス主義の影響を受けた都市部出身の行政官僚達が、村落共同体に基づく農村部に地方行政官として配属されることで制度レベルの革新的改革を試みようとした動き、などが生まれたと捉えることが出来る。そしてこの様に捉えることで、1930年代前後を生きた煩悶青年も行政官僚も共に、都市に象徴される社会的自我を尊重する価値と、社会的自我へのこだわり自体が存在しない農村的な価値との狭間で煩悶したと説明することが出来る。

以上を踏まえ本研究では、橋川の1930年代前後の社会的自我の像が最も分かる作品として初の本格的論考『日本浪漫派批判序説』<sup>5</sup>（初出1957－59年）に着目することで、橋川が本作品で日本ロマン派を語る際に内在させていた論理の原型が、その後の諸作品でどの様に展開されていったのかを示すこととする。その際には、橋川が本作品において形成させていたと考えられる普遍性／特殊性の独自の整合性に着目することで、橋川が、戦後に現れた様々な状況主義的な社会潮流に関して一貫した批判を可能としていたことも示してみる。なお本研究では、橋川が近代主義やマルクス主義を意識して観念レベル重視の語りをしていた時期をⅠ期（1957年－）、国家主義を意識して制度レベル重視の語りをしていた時期をⅡ期（1964年－）と時期区分する。その上で、日本ロマン派への批判を乗り越えるべく「1930年代前後」の社会的自我をめぐる煩悶にこだわり続けた橋川の「戦後のⅠ期とⅡ期」の語りそのものを、「現代（2014年）」から捉えることで、3つの時代の「知」の偏りを相対的に検証することを目標とする。

## 1. Ⅰ期（1957年－）－橋川が描く日本ロマン派の論理－

Ⅰ期（1957年－）の橋川は、戦後日本で状況主義的に主流となっていた近代主義やマルクス主義が「誤ってしまった日本の近代化」や「遅れてしまった日本の変革」という形で、日本の近代を否定的な像で捉えていることを問題視していた。それは橋川が、近代そのものに端を発する社会的自我をめぐる煩悶は1930年代前後に顕在化したという「普遍」の視座と同時に、各国・各地域・各人によってその現れ方は多様であったという「特殊」の視座を持ち合わせていた為であるといえる。本節では、この橋川の普遍性／特殊性の整合性がどの様に成り立っていたのかを、橋川が日本ロマン派を語る際に内在させている論理を通じて考察する。その際には、橋川の初の本格的論考『日本浪漫派批判序説』（初出1957－59年）を素材として読み解くこととする。

### 1－1 橋川の普遍性／特殊性の形成

まず橋川は個と社会の矛盾という近代をめぐる普遍的視座について、各村落共同体に心の拠り

所を求めている前近代的心情と、近代国家の下で各自の責任主体を想定された近代的心情とが、矛盾を含みつつも結合して生まれたものとしてロマン主義を提示している。そして橋川は特殊の視座については、ロマン主義はドイツや日本で特に顕在化したと見ており<sup>6</sup>、日本という地域においては国学と日本マルクス主義が結合することで日本ロマン派が生まれたと観念のレベルで語っている〔山之城 2014：85〕。

また戦中に日本ロマン派の原体験を持つ橋川は、保田与重郎<sup>7</sup>について、日本の土壌に根ざしていた「国学」の論理によって、戦中の人々の心の拠り所となった「実存」<sup>8</sup>という名の観念的な社会的自我を形成し得た人物として評価している。この橋川のスタンスからは、戦後日本において状況主義的に主流となった近代主義やマルクス主義に対して、危機的状況下では変革主体を含む社会的自我を形成し得なかった事実に対峙する必要を説いていることが伺える。また橋川には、明治以降に「社会科学」として輸入されたはずのマルクス主義が実質的には「人間的統合シンボル」として定着しなかった為に、人々は「実存」という観念的な社会的自我を求める様になったという語り方もとれる〔山之城 2014：85〕。

また橋川が日本ロマン派について、「…その組織論が『日本美論』であり、その戦略が『反文明開化官僚主義』であったといえれば私のいう意味も明白であろう。」と示していることに注目すると、1930年代前後の危機的な社会状況下では日本ロマン派は、「実存」に関わる「日本美論」という基盤的な視座の方を、明治国家成立以降の反「官僚」という戦略的な視座よりも優先せざるを得なかった為に、結果として日本ロマン派は現実的な政治認識を失わざるを得なかったと解釈出来る〔山之城 2014：85〕。

このことより、橋川が「官僚」を「実存」と対極に位置付けて批判する際には、官僚制度の実体ではなく、ロマン的イロニイという観念的な視座から「近代批判」を提起している意味合いが強くなっているといえる。つまり橋川は、「官僚」的なものによってマルクス主義の革新的契機を含んだ「実存」が侵食されていくという構図を通じて、観念的なレベルで左翼批判をしている特徴がある。よって橋川の反「官僚」というモチーフは、「実存」に価値付けしない近代文明および近代合理性といったビジョンが含まれつつ、「国家主義」的なものを批判する歴史意識から導かれているものと解釈できる<sup>9</sup>。なお橋川が観念的に「官僚」批判をしているのは、1930年代前後の社会的自我をめぐる「煩悶」の源流を、エリート官僚としての立身出世を望まない価値観を持った明治末期の若者の「煩悶」に据えている為であると考えられる。

## 1-2 「煩悶」の論理から創られた社会的自我

前節ではⅠ期の橋川が普遍性／特殊性の整合性を形成しつつも、社会的自我を確立させていたとする日本ロマン派の論理を評価したり、社会的自我を確立させていなかったとするマルクス主義や近代主義を批判したりする際に、観念的な語りをしている特徴を抑えた。本節においてはⅠ期の橋川が、革新的契機を含んだ社会的自我を形成していたと捉えている保田与重郎の論理を、『日本浪漫派批判序説』（初出 1957 - 59 年）を通じて具体的に分析する。

橋川は、「…日本ロマン派と現代の実存主義とのある種の相似的な感覚が生れてくる。つまり、サルトルのいう、神の不在の明かな認知と、それが極度に厄介な事実であることの矛盾感が蓄積され、その解決が迫られる。」〔橋川 2000a：48〕と述べ、日本ロマン派に関する「実存」の間



題は、神の存在の認識をめぐる煩悶であると指摘している。そして橋川は、近代そのものの必然的な問題である神の認識をめぐる煩悶を超克し得た人物として、日本ロマン派に位置づけられていた保田与重郎を挙げている。なおその際の橋川の語りには、土着的・素朴に宿っていた日本の「神々の喪失」と、ヨーロッパにおける「神の死」とを混同しつつ、「実存」を語っていることが伺える。

橋川は、保田の唱えていた「国学」の論理に内在するものこそが、「実存」という名の社会的自我として1930年代前後を生きる人々の心の拠り所になるものであったと捉えている。その際に橋川は、保田与重郎の論理は本居宣長の論理に通じており、「神々に基づく自然」／「理に基づく人為」という2つの相反する価値の架橋が、一切の規範化と観念的絶対化を排した形で実現することで〔橋川 2000a: 69〕、「『理』に対する神々の実存」〔橋川 2000a: 68〕が生み出されると論じている。さらに橋川は、本居宣長の「儒教的規範主義（老荘的自然哲学と朱子学的合理主義への両方）への批判」について、「人間自然の肯定」と「人間自然の絶対化の否定」とを繋いだものであると評価している〔橋川 2000a: 67〕。これは橋川が本居の論理の中に、人間が「自然」であることを肯定するが絶対視はしないという形でのバランスを見出した為であると解釈出来る。

### 1-3 農本主義への共鳴で頓挫した「煩悶」

前節では橋川が観念的という所の、保田与重郎が本居宣長に依拠した「国学」の論理が、「神々に拠る自然」／「理に拠る人為」の架橋に基づくことを考察した。本節では、「自然」／「人為」の「分離」の契機を持つこと自体が困難だった為に、「架橋」によって初めて形成されると述べられている社会的自我の形成に至れなかった人々の煩悶に着目してみる。

橋川は「もとより、明治維新以降の政治的営為があり、富国強兵と自由民権と立憲政治等々の努力が積みあげられたことは事実であった。しかし、その一世紀に垂んとする『政治的』行動の極限において、あるサイクルの終結を思わせるかのように、再び国学的『自然』の観念が究極の根拠としてあらわれる。」〔橋川 2000a: 86〕と述べ、明治維新後に「自然」への究極の正統性が生まれてしまったことで、「自然」／「人為」を分離する契機が弱まったとしている。その際に橋川は、近代日本においては、「（「自然」にあたる）自然的自然」と「（「人為」にあたる）人間的自然」との未分離によって、政治状態が自然状態と同一視されつつ美へと還元される状況が生まれてしまったと捉えている〔橋川 2000a: 86 - 87〕。その際に橋川は、この「人為」と「自然」の未分離状況によって硬直的な「国学」が生じたことが、現実感のない日本マルクス主義の生まれる原因になったと捉えている<sup>10</sup>。

さらに橋川には保田に依拠しつつ、宣長の開拓した理念が「俗流」祭政一致思想によって儒教的理念や近代主義理論と妥協して「政治」に屈することを批判する側面がある〔橋川 2000a: 66〕。これは橋川が、日本ロマン派に通じる「国学的農本主義」は「日本近代に対するトータルな文明批判」〔橋川 2000a: 63〕を意図するものであったとして評価する一方で、「『俗流』祭政一致思想」に通じる「国体的農本主義」については「…明治の新国家形成が、その基本的な矛盾克服のために創出した家父長制的国家観のイデオロギー的支柱をなすものとして、概して『富国強兵政策のためにとられた農の尊重』にほかならなかった。」〔橋川 2000a: 64 - 65〕として問

題視している為であるといえる。そして橋川は、いわば、政治に屈する「国体的農本主義」と、政治に屈しない「国学的農本主義」が「パラレル」な関係にあったことが、近代日本における人々の心の拠り所を混乱させ、煩悶青年を生み出したと捉えている。

なお「パラレル」なことに關して橋川は、「国学的農本主義」も「国体的農本主義」も共に、土着的な郷土回復を目指す為に明治以降の新国家形成の原理に基づく「官僚制度」を批判し、反近代主義の視座があったことを挙げている。そして「パラレル」でないことに關して橋川は、①「(宣長の「みち」の思想の延長に立った) 神道に基づく無政府主義」を唱えていた「国学的農本主義」と、②「家族」や「人道」を重んじることで反「官僚」政治を唱えていた「国体的農本主義」との違いを挙げている。特に橋川は、①は「都市のインテリの浮動心理」〔橋川 2000a : 62〕へ響いたものとし、②については、「守旧層」〔橋川 2000a : 62〕へ響いたこんどうせいきやう権藤成卿の「制度学的農本主義」と、「非都会的インテリ層 (= 青年将校)」〔橋川 2000a : 62〕へ響いた橘孝三郎の「人道主義的農本主義」を想定している。

以上より橋川は、当時の日本における社会変革の潮流として農本主義にも意義付けており、「都市のインテリ」、「守旧層」、「非都会的インテリ層」のそれぞれに影響力があつた農本主義が存在していたと捉えていることが分かる。このことを特に「都市」と「非都会」の関係で見みると、「都市のインテリ」に影響が強かったと考えられる日本ロマン派に通じる「国学的農本主義」と、「非都会のインテリ層 (= 青年将校)」に影響が強かったと考えられる「国体的農本主義」との根本的な価値観の違いは、社会的自我を生み出すにあたって、マルクス主義と家父長制度のどちらに価値付けをしているかということに起因していることが分かる。つまり、「非都会のインテリ層 (= 青年将校)」の方はもともとは家父長制度に心の拠り所を求めようとする環境にあつたことが想定されるのに対し、「都市のインテリ」の方はマルクス主義に心の拠り所を求めようとする環境にあつたことが想定される。これらのことより橋川の1930年代前後の農本主義の像とは、「都市」と「非都会」との価値の差異や混乱を浮き彫りにするものでありつつも、「都市」以外のより多くの人々が煩悶を超克して社会的自我を生み出し得る革新的な動きにも繋がるものとして描かれていたといえる。その際の橋川の語りには、マルクス主義や国学的農本主義に關しては観念レベルの語りがありつつも、国体的農本主義については家父長制などについて制度レベルの語りが混ざっている。

## 2. II期(1964年-) - 橋川による「煩悶」の展開 -

I期の橋川は、日本マルクス主義の革新的契機を受け継いだとされる日本ロマン派の論理を評価しつつも、日本ロマン派とパラレルな関係にあつたとされる農本主義の家父長制度への価値付けについては批判していることから、観念のレベルを重視しつつ制度のレベルも論じていたといえる。その後のII期における橋川には、日本マルクス主義の革新的契機に關する観念的レベルの問題意識を保持しながらも、家父長制度や官僚制度などの制度レベルの問題意識を新たな形で展開しているという特徴が捉えられる。つまりII期における橋川は、観念のレベルを保持しつつも制度のレベルを重視する語りになっている。よって橋川のII期を扱う本章では、橋川がI期に語っていた日本ロマン派に内在する論理がどのように発展的に描かれていったのかについての考

察を行う。

## 2-1 観念重視から制度重視の語りへ

本節では、橋川がⅠ期からⅡ期にかけて観念レベルから制度レベルへ重みづけを変えた要因を、当時の社会潮流への橋川の語りを通じて検討してみることとする。これはⅡ期の橋川が1930年代前後を語る際には、Ⅰ期と同様に日本ロマン派に内在するとされる「煩悶」が語りの中心に据えられているものの、Ⅱ期の橋川が制度への関心を高めたことに関しては社会状況の影響が考えられる為である<sup>11</sup>。

Ⅰ期に引き続いてⅡ期にも日本ロマン派に内在する社会的自我の問題を念頭に置いて観念レベルと制度レベルへの関心を保持していることが分かる橋川作品としては、1964年に初出された「ネオ・ナショナリズムの所在」〔橋川 1964 = 2001c〕が挙げられる。この作品において橋川は、日本の「特殊性」を肯定する立場を取っている林房雄の作品『大東亜戦争肯定論』を独自のスタンスで批判していることから〔橋川 1964 = 2001c : 226〕、橋川には日本の「特殊性」を肯定する思想潮流に抗う視座があったと解釈出来る。橋川は林を批判する際に、①林が日本のマルクス主義と同様の硬直的な唯物史観に陥っていること〔橋川 1964 = 2001c : 231〕、②林が右翼啓蒙史観から脱却した視座をもっていないこと〔橋川 1964 = 2001c : 232〕、③林が明治維新という己の体験には即さない時期に着目した歴史観をとっていること〔橋川 1964 = 2001c : 232 - 233〕、を挙げているが、この橋川の硬直的なイデオロギーへの批判的視座は、Ⅰ期から保持していたものであると考えられる。

さらに本作品において橋川は、「特殊」な日本を肯定する上山春平についても批判している。その際に橋川は、人類生態学とマルクス主義とを統一した上山の生態論的革命理論について、権藤成卿の「東洋制度学」に象徴される「土着農本思想」の様な空想性が目立つものとして危惧している〔橋川 1964 = 2001c : 229 - 230〕。この橋川の「土着農本主義」への制度レベルの着目は、Ⅰ期の橋川が現実政治への対応能力の欠けたものとして問題視していた「国体的農本主義」への関心が保持されていた為であると解釈出来、Ⅱ期の橋川はこの問題関心を展開する意図で制度レベルの語りに重心を置くこととなったと考えられる。但し橋川の制度レベル重視の語りは、官僚制度および国家制度に回収されることに抗うべく、日本ロマン派に内在する社会的自我をめぐる「煩悶」をした人々を描いているという特徴がある。

## 2-2 「煩悶」を昇華した社会的自我

前節ではⅡ期の橋川が、社会状況に反応することで観念レベル重視の語りから制度レベル重視の語りになっていったことを考察した。本節ではⅡ期の橋川が、Ⅰ期に形成させていた社会的自我をめぐる内在的論理をどの様に発展させていたのかを分析する。Ⅰ期の橋川は、「実存」という名の社会的自我と対極に「官僚」を位置付けていたが、特に1930年代前後の農本主義を論じる際には、「国学的農本主義」と「国体的農本主義」が共に観念的に「官僚制度」を批判していたことは評価しつつも、日本ファシズムに直接的に取り込まれていくこととなった「家族制度」を「国体的農本主義」が唱えていたことについては問題視していた。本節においてはⅡ期の橋川が、この農本主義の問題に改めて対峙しようとした際に、ロマン主義の体験を経て「生活」とい

う名の社会的自我を確立し得た人物として明治末期に農政学の官僚であった柳田国男を挙げることで、制度レベルを重視した形での反「国家主義」を唱えていることに着目する。なお柳田を語る橋川の語りを分析する際には、橋川の普遍性／特殊性の整合性を抑える形で行うこととする。

1964年に初出された論考「柳田国男」〔橋川 1964 = 2000b〕において橋川は、普遍性／特殊性についての独自の整合性を保持していた故に、日本文化の特殊性を肯定するスタンスの文化人類学の潮流の普遍性／特殊性の整合性のなさそのものを批判する視座を持っていたといえる。橋川は、人類の諸問題に取り組む「世界人類学」の基礎となった柳田の「日本民俗学」〔橋川 1964 = 2000b : 231〕には、「各地域民衆の相互になぞめてみえる生活感情の内面的な意味」〔橋川 1964 = 2000b : 232〕を明確にし、「日常生活の中で無意識にくりかえされているある些細な生活事実が、いかにはるかな生活伝統によって意味づけられているか」〔橋川 1964 = 2000b : 233〕を解き明かすことで、「人間のもっとも微妙な心意生活にも法則があること」を「人間は人間によって理解可能である」という「ユニヴァーサルな人間主義」から探究する姿勢があったとして評価している〔橋川 1964 = 2000b : 234〕。このことより、橋川にとっての柳田の思考とは、「世界人類学」という普遍性と、「各地域民衆」という特殊性とが、人間の日常の「生活」事実〔橋川 1964 = 2000b : 305〕という観点によって繋がっているものであると解釈出来る<sup>12</sup>。

さらに橋川からは、「実生活における諸経験」〔橋川 1964 = 2000b : 305〕という文脈の中でロマン主義の影響を受けた柳田を語る際にも、「近代的な短調の甘美さ」という近代に着目した「普遍性」と、「繊細な西欧のうるおい」や「風土的和歌的な言葉の匂い」という各地域に着目した「特殊性」とを併せ持った詩を柳田が創作していたという形で、普遍性／特殊性の整合性の保持が捉えられる〔橋川 1964 = 2000b : 247〕。

なお橋川は、この「実生活における諸経験」に基づいたロマン主義の主情的な「叙情詩」の境地は、『文学界』終刊後、即物的に心の拠り所を「国家主義」に求めていくという形の「ありのまま」を肯定する「抒事詩」の境地に変化したという歴史像を示している〔橋川 1964 = 2000b : 258〕。この歴史像において橋川は、「藤村・花袋のいわゆる自然主義も、柳田が新しい夢を託そうとした科学＝農政学の方法も、概観的にいえば、そうした青年の心の変化に対応する行き方にほかならなかった。」〔橋川 1964 = 2000b : 258 - 259〕と述べており、柳田が農政官僚になった背景を、当時の煩悶青年に共通するロマン主義の質的変容の経験から探っている。そして橋川は、このロマン主義の質的変容という問題の本質が、その後に農政官僚になった柳田が、「地方改良運動」という国家主義的要素が強い政策に対し、独自のスタンスで意義を唱える原動力を担保したと捉えている。

その際に橋川は、「日本国家の構造原理の根底にある農本主義」を取り込んでしまう国家制度の問題を念頭にして〔橋川 1964 = 2000b : 269〕、「…何よりも、日本農業制度の根幹をなした小作制度と、その経済的表現というべき小作料物納制度とに対して、柳田がもっとも早い批判者であり、しかも経済科学的見地からする批判者であったという事実…」〔橋川 1964 = 2000b : 267〕を評価している。また橋川が、「彼（柳田）の社会主義への態度は、一言でいえば消極であった。しかし、そのことは、柳田が正統的保守主義者であったことを意味しないのである。」〔橋川 1964 = 2000b : 267〕と述べたり、「官僚主義的解釈法学の思考は柳田の資質に合わな



かったし、豪放な行政運用の妙味を至上とする保守主義的政治学の思考法も、彼のものではなかった。いわば人類の生活とその政治というヴィジョンにおいて、柳田の立場は奇妙に孤独なものであった。」〔橋川 1964 = 2000b : 271〕と述べていることから、橋川が柳田について硬直的・技術的な「保守主義」や「官僚主義」でなく、「人類の生活」に象徴される普遍性／特殊性の整合的なヴィジョンを持っていたことを評価していたことが読み取れる<sup>13</sup>。なお橋川は、「…柳田の国家思想が少なくとも自然法的契約原理に根ざすものではなく、むしろ有機体説の系譜に属する…」〔橋川 1964 = 2000b : 265〕と述べていることから、柳田が国家主義に回収されない社会的自我を形成し得た理由を、土着的なものに価値付けする要素を持つ原体験としてのロマン主義に見出しているといえる。

### 2-3 初発的「煩悶」としての家族関係

前節では、国家主義を制度レベルから批判することを念頭にしていたⅡ期の橋川が、「人類」という「普遍性」と、「民衆」という「特殊性」とを、「生活」という名の社会的自我を確立することで架橋させた人物として柳田を描いていることを考察した。本節では橋川が、家父長制度の中での家族問題の煩悶を国家主義へ抗おうとする社会的自我の初発形態と捉えることで、個別・「特殊」な心情レベルの問題が近代の国家制度をめぐる「普遍的」な政治レベルの問題にまで連動していることを示している作品『昭和超国家主義の諸相』〔橋川 1964 = 2001b〕を考察する。

本作品で橋川は、他国のファシズムとの違いを無限遡及の論理で捉える丸山眞男を批判しつつ<sup>14</sup>、その時代との関連で「超国家主義」<sup>15</sup>を捉える重要性を指摘している。そして橋川は、伝統的国家主義と区別される「自我」の意識や、明治的な伝統国家主義からの超越・飛翔の程度に注目することで、日本の「超国家主義」の初発形態を検討するという独自の歴史認識を示している。その際に橋川は、「下層中間層の煩悶青年など青年一般が持つ自我意識が現実の国家を超越した価値を追求し、社会的状況を突破して絶対的なものと結びつこうとした」〔橋川 1964 = 2001b : 33〕という形で、社会的自我を生み出すべく心の拠り所を求めて煩悶する青年達を描いている。

その際に橋川は、井上日昭に象徴される昭和期テロリストとは、家族問題を昇華しようとした朝日平吾に象徴される大正期テロリストの特徴を徹底したものであるとしており、特に朝日については「…朝日の権威（＝父シンボル）に対する攻撃と防禦の心理が鮮明に浮び上っている。」〔橋川 1964 = 2001b : 17〕という表現や、「…父に関連した自己懲罰の衝動が、無意識のうちに有名人（＝父の代償シンボル）への接近、甘えという倒錯した形をとってあらわれている…」〔橋川 1964 = 2001b : 18〕という形で述べている。そして橋川は朝日のテロは、単なる私怨としてではなく政治過程の発生的一段階目として本能的・原初的なものと捉えている。さらに橋川は二段階目としては、法華経などの宗教的素養による「自我」意識を持っていた井上を挙げており、三段階目の完成形態としては伝統的国家からの飛翔とカリスマ的能力を持っていた人物として北一輝を挙げています。以上より橋川は、家父長制度の中で父に「煩悶」する青年一般を国家制度への抗いの初発形態として提示した上で、その抗いの程度を三段階に分けていることが分かる。

橋川は既にⅠ期において、日本ロマン派に通じる「国学的農本主義」を理想としながらも、こ

の「国学的農本主義」とパラレルな関係にあるものとして権藤成卿や橘孝三郎の唱えた「国体的農本主義」も論じていた。橋川は本作品において農本主義を語る際には、①牧歌的なロマンティズムが特徴の文学青年であった橋を〔橋川 1964 = 2001b : 51〕、井上日昭と共に政治過程の発生の第二段階目とし〔橋川 1964 = 2001b : 23〕、②権藤の制度学思想については、直接的な政治的影響力はなかったとしつつも〔橋川 1964 = 2001b : 53〕、「国家を超えた人間のヴィジョンに訴えるもの」〔橋川 1964 = 2001b : 55〕として北一輝の革命のヴィジョンと同様に青年達の心の拠り所になったと述べている〔橋川 1964 = 2001b : 54〕。この橋川が述べる所の、政治過程の発生の第三段階に当たる理想・完成型の北一輝に関しては、心の拠り所をめぐる煩悶を経て社会的自我を確立したと捉えられている保田与重郎や柳田国男が念頭に置かれているものと考えられる。

## おわりに

1930年代前後に個と社会の狭間で心の拠り所を求めて煩悶した人々の姿に普遍性を見出している橋川は、その煩悶が顕在化した日本を語る際にヨーロッパ特有の概念に拠っている節が見受けられるものの、①日本の近代国家に取り込まれない為の変革主体の契機を含んだ社会的自我の確立を完成させていたとする人物（保田や柳田など）を評価し、②日本の近代国家に回収される要素を含みつつも社会変革の為に煩悶した人物（権藤や橘など）にも寄り添うことで、それぞれの社会的自我の形成レベルを尊重していたといえる。橋川の社会的自我をめぐる煩悶の語りには、既にⅠ期においてそれを近代そのものの問題として捉える普遍的視座とその現れが多様であることを尊重する特殊的視座の整合性が形成されていたが、Ⅱ期においてはさらに特殊的視座を多様化することで普遍的視座をも充実させていたと考えられる。

特に、Ⅱ期の橋川が「伝統的国家からの飛翔」の程度を基準として社会的自我の発生を三段階で提示したことについては、Ⅰ期の橋川が既に観念的に提示していた「近代国家に抗おうとしたマルクス主義に基づく変革主体」という構図が、「家父長制的国家に抗おうとした多様な段階の変革主体」といういっそう複雑な段階別として展開されたものと捉えられ、橋川の特異性の視座を充実させる上で明確な意義があったと考えられる。そしてⅡ期の橋川が、家族をめぐる煩悶を社会的自我が生まれる上での「第一段階目」と置いたことで、近代そのものに端を発するよりパーソナルな心情レベルの問題が政治レベルの問題にまで連動していることが示されたといえる。

橋川は、近代そのものに起因する最も原初的な問題は家族に心の拠り所を見出せないゆえの煩悶であったとし、家族関係が国家制度に侵食されることへの抗いという形で捉えていたといえる。現代において橋川のこの考え方を応用していく際には、橋川が想定していた個別・特殊な煩悶の「場」である「家族」や「地域」や「国家」などに「他者性」や「差異」なども考慮することで、さらに多様で複雑な煩悶を近代そのものの問題として包括することが可能になるものと思われる。戦後において橋川が1930年代前後を描く際に想定していたのは、マルクス主義に基づく変革主体の価値が浸透していた都市部と、村落共同体に基づく即物的な価値が浸透していた非都市部との価値のせめぎ合い、という構図であったともいえる為、当時の橋川が想定していた状

況を現代の状況で捉え直してみる必要がある。橋川が持っている普遍的視座を特殊的視座の充実によって深めていく発想は、多様な特殊性の中に多様な普遍性を見出す視座や、多様な普遍性の中に多様な特殊性を見出す射程が含まれていると考えられる。

近代そのものの問題に端を発するパーソナルな心情の混乱に普遍性を捉える橋川の視座は、マックス・ウェーバーの提示する概念でいうところの「心情倫理」への着目にあたるものであると考えられる。自らの戦中の原体験に基づいた「心情倫理」にあたるものを最重視している橋川に対し、あえて戦争体験の感情を語らずに西欧モデルの責任主体を想定した形で「責任倫理」を重視していた思想家としては、橋川が最も意識していた論者である丸山眞男が挙げられる。しかし、戦後の啓蒙的知識人のリーダーとされた丸山については、あえて戦争体験での私的感情を封印し、「心情倫理」を「責任倫理」から切り離す立場を引き受けざるを得なかった状況であったことを想定する必要があると考えられる。この様に考えてみると、橋川の自らの「心情倫理」を投影させて近代そのものの矛盾をリアルに捉えようとする普遍的な視座は、丸山本人が語り得なかった「心情倫理」に関する問題をも先取りした射程を持ったものであったと考えられる。

橋川の「心情倫理」への普遍的な価値付けは、1930年代前後という危機の時代に心の拠り所を求める人々の煩悶を救ったのは日本のマルクス主義の代替としての日本ロマン派であったという実感に起因するものであるといえる。それ故に橋川にとっての普遍性とは、現実への対応能力が脆弱な日本のマルクス主義の問題をいかに克服して、近代に顕在化した西欧による支配に抗うべきかという問いを常に念頭にしているものであると解釈出来る。つまり橋川にとって、戦後日本に台頭したマルクス主義や近代主義や国家主義などの思想潮流は、普遍的なビジョンへ通じる視座を持ち合わせていない為に、西欧のイデオロギーに屈服している様に映っていたものと考えられる。橋川はこの西欧のイデオロギーへの屈服を克服するには、各国・各地域・各人に特有な土着的なものと、近代理性に正統性をもつものとの狭間でパーソナルな心情に起因した社会的自我を創り出す姿勢が重要であると唱えていると解釈出来る。

#### 〔参考文献〕

- 青木保（1999）.『『日本文化論』の変容』中公文庫  
 荒木田岳（2012）.「地方財政調整制度の社会的基盤に関する覚書」『近代日本の都市と農村』青弓社  
 梅原猛（1968）.「解説 ニヒリズムの系譜」『戦後日本思想大系3 ニヒリズム』筑摩書房  
 大澤真幸（1996）.『虚構の時代の果て』筑摩書房  
 大澤真幸、成田龍一（2014）.『現代思想の時代』青土社  
 加藤千賀子（2012）.「戦間期における『農本青年』運動」『近代日本の都市と農村』青弓社  
 川本隆史、荻部直（2014）.「討議 丸山眞男を問い直す」『現代思想 八月臨時増刊号』青土社  
 鈴木貞美（2009）.『戦後思想は日本を読みそこねてきた』平凡社  
 橋川文三（2000a）.「日本浪漫派批判序説」『橋川文三著作集1』筑摩書房  
 橋川文三（1964 = 2000b）.「柳田国男」『橋川文三著作集2』筑摩書房  
 橋川文三（1975 = 2000b）.「柳田学のこれから」『橋川文三著作集2』筑摩書房  
 橋川文三（2000c）.『橋川文三著作集3』筑摩書房  
 橋川文三（1960 = 2001a）.「日本近代史における責任の問題」『橋川文三著作集4』筑摩書房  
 橋川文三（1961 = 2001b）.「テロリズム信仰の精神史」『橋川文三著作集5』筑摩書房  
 橋川文三（1964 = 2001b）.「昭和超国家主義の諸相」『橋川文三著作集5』筑摩書房

- 橋川文三 (1965 = 2001b). 「新官僚の政治思想」『橋川文三著作集 5』筑摩書房
- 橋川文三 (1975 = 2001b). 「戦争責任を明治憲法から考える」『橋川文三著作集 5』筑摩書房
- 橋川文三 (1964 = 2001c). 「ネオ・ナショナリズムの所在」『橋川文三著作集 6』筑摩書房
- 橋川文三 (1967a = 2001c). 「安保後八年目の独白」『橋川文三著作集 6』筑摩書房
- 橋川文三 (1967b = 2001c). 「現代知識人の条件」『橋川文三著作集 6』筑摩書房
- 橋川文三 (1968 = 2001c). 「日本保守主義の体験と思想」『橋川文三著作集 6』筑摩書房
- 橋川文三 (1974 = 2001c). 「日本文化・フォニイ史論雑考」『橋川文三著作集 6』筑摩書房
- 橋川文三 (2001d). 『橋川文三著作集 7』筑摩書房
- 橋川文三 (2001e). 『橋川文三著作集 8』筑摩書房
- 橋川文三 (1968 = 2001f). 「ナショナリズム」『橋川文三著作集 9』筑摩書房
- 橋川文三 (2001f). 「昭和維新試論」『橋川文三著作集 9』筑摩書房
- 橋川文三 (2001g). 『橋川文三著作集 10』筑摩書房
- 平石典子 (2012). 『煩悶青年と女学生の文学誌』新曜社
- 松本健一 (2000a). 「解題」『橋川文三著作集 1』筑摩書房
- 丸山真男 (1940 = 2003a). 「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」『丸山真男集 第一巻』岩波書店
- 丸山真男 (1941 = 2003b). 「近世日本政治思想における『自然』と『作為』」『丸山真男集 第二巻』岩波書店
- 安丸良夫 (2012). 『現代日本思想論』岩波書店
- 山崎正和 (1986 = 1993). 『不機嫌の時代』講談社
- 山之城有美 (2014) 「戦後日本における橋川文三の『1930年代像』」『人間社会研究科 紀要』日本女子大学

- 
- 1 日本の近代をめぐる人々の「個別」の「不安」を論じた先行研究としては、山崎正和の作品『不機嫌の時代』（初出1986年）が挙げられる。山崎はこの作品において、「実存は不安な存在だということは、この哲学（実存哲学）の大前提…」で、「…自分がすでに何かであることから来る不安ではなくて、まだ何ものでもないことから由来する不安だといへる。」と述べている〔山崎1986 = 1993 : 246〕。また、「社会および全体」に着目して日本の近代を論じた先行研究としては、鈴木貞美の作品『戦後思想は日本を読みそこねてきた』（初出2009年）が挙げられる。鈴木は、日本では「近代文明の進展に対する生命の危機感」に対応する為に様々な動きが起こったとしている。
  - 2 橋川文三の普遍性／特殊性の整合性については、拙稿「戦後日本における橋川文三の『1930年代像』—『日本浪漫派批判序説』を素材として—」で考察を試みている〔山之城 2014 : 90-91〕。なお、橋川の歴史意識が特殊性または普遍性に結びついていることが論じられている先行研究についても拙稿で検討している〔山之城 2014 : 82-83〕。
  - 3 橋川が江戸時代の「自然」と「人為」をめぐる問題を取り上げながら社会的自我の問題を論じようとするのは、橋川が、江戸時代の「自然」と「作為」の概念を用いて近代的思惟の問題を検討していた丸山真男の論〔丸山 1940 = 2003a〕〔丸山 1941 = 2003b〕に拠っていた為である。但し橋川は、丸山真男の歴史像に肯定的視点と批判的視点の両方を持っていた。橋川は、丸山が日本の土壌の「特殊性」を尊重した論を展開していると思われる場合には肯定的だが、日本の土壌の「特殊性」を西欧と比較して異常視していると思われる場合には批判的なスタンスを示している〔山之城 2014 : 91〕。
  - 4 これについては梅原猛がいうところの、ヨーロッパの「実存主義」がギリシャ哲学とキリスト教で作られた形而上学的な価値体系の崩壊で生まれた「存在の無の自覚」というニヒリズムに起因するものであったのに対して、日本における「実存主義」とは、「存在の無の自覚」を唱えていた固有の神々の存在が明治維新後に台頭した唯一絶対神としての天皇の存在に消されてしまったことで生



- れたニヒリズムであったという分析が的確であると考えられる〔梅原 1968：13-19〕。なお梅原は、近代の日本において天皇神に反抗する思想はマルクス主義であったが、マルクス主義への信頼が失われた時にニヒリズムが起こった〔梅原 1968：20-21〕という説明している。
- 5 本作品は、同人雑誌『同時代』の第四号（1957年3月15日発行）から第九号（1959年6月5日発行）において最終章を除き連載発表され、その後『日本浪漫派批判序説』（1960年2月、未来社刊）に初めて収められた〔松本 2000a：359-360〕。なお本論考のタイトルの表記には「漫」ではなく「曼」が使用されている。
  - 6 橋川は、ドイツのニヒリズムも日本のニヒリズムも、心の拠り所を守る為の「転向」の問題を内在させていると捉えている。但し橋川は、ドイツのニヒリズムについては極限的な主観性による破滅を「カルヴァン教」から「カトリック教」への「転向」で救済し得たのに対し、日本のニヒリズムについては「国体」思想に拠る極限的な「無」への破滅から救済される術がなかったと捉えている〔橋川 2000a：47〕〔橋川 1961 = 2001b：213〕。
  - 7 橋川は保田与重郎について、①日本マルクス主義に基づいている、②半封建制を含んだ形のラジカルな近代批判をした、③非政治的なイロニイの弱者、④政治への屈服を批判し無政府主義を唱えた、などの語りをしていることから、保田が「右翼のゴロツキ」でも「新官僚のファシスト」でもない政治的アンチテーゼという変革主体を持った人物であることを示している〔山之城 2014：90〕。
  - 8 橋川は、郷土愛に基づいた「耽美的パトリオティズム」と呼ぶに相応しい、「一種の根源的実在」として提示されたロマン派の「美」は、戦後においても隠された原理として作用していると述べている〔橋川 2000a：89〕。
  - 9 なお橋川は戦争責任については、Ⅰ期の作品「日本近代史における責任の問題」〔橋川 1960 = 2001a〕で1930年代前後のマルクス主義の問題に注目しているが、その後の作品「戦争責任を明治憲法から考える」〔橋川 1975 = 2001b〕では明治期に遡って国家主義の問題に注目する様になっている。
  - 10 その際に橋川は、近代日本における自然主義や私小説の問題に言及する形で、日本のマルクス主義の現実への耐久力のなさを批判している。
  - 11 Ⅱ期の橋川は1965年に初出された「新官僚の政治思想」〔橋川 1965 = 2001b〕で、1960年に経験した安保闘争を「政治的理想主義の敗北」として問題視しており、安保闘争後に脱政治化が生じたことで「官僚テクノクラート」という新たなネオ・リアリズムが生まれたとみている。そしてこの作品において橋川は、日中戦争以降の革新官僚がデモクラシーやマルクス主義などの影響を受けた社会革新を目指していたことを肯定する一方で〔橋川 1965 = 2001b：182〕、革新官僚が様々なイデオロギーの抗争下で独自性を発揮しようとしつつも、結果的には国家意思のみせかけの代行者として軍部の台頭を擁護する形でファシズムに回収されたことを問題視している〔橋川 1965 = 2001b：193〕。
  - 12 橋川が柳田国男を論じた作品としては1975年に初出された論考「柳田学のこれから」も挙げられる。この論考で橋川は柳田を、「民間信仰に拠る常民」／「農政学に拠る臣民」を架橋することで心の拠り所をめぐる煩悶を克服し得た人物として捉えていると解釈出来る〔橋川 1975 = 2000b：355-356〕。その際に橋川は、柳田が「『急進的』な正統派農政官僚の行政万能主義からは異端視されるほかはなかった。」〔橋川 1975 = 2000b：355〕と述べている。
  - 13 橋川は、1968年に初出した論文「日本保守主義の体験と思想」〔橋川 1968 = 2001c〕においても、柳田国男について、保守主義と同時に進歩主義やマルクス主義への親和性を併せ持つことで、「人間社会」の無限の進歩の可能性を信じていた人物であったとして評価している。
  - 14 橋川は丸山が、日本ファシズムを天皇制国家原理そのものの特質とし、明治国家以降の家族主義や農本主義や大アジア主義の特性も指摘していると述べている。さらに橋川は丸山が、露骨な対外的侵略戦争、ナショナリズムの内在的衝動を持つ武力的膨張などで日本の支配原理を説明しているとも論じている〔橋川 1964 = 2001b〕。
  - 15 なお橋川は「超国家主義」について、「いわゆる超国家主義の中には、たんに国家主義の極端形態というばかりでなく、…現実の国家を超越した価値を追求するという形態が含まれている」〔橋川 1964 = 2001b：62〕と述べており、このことから、「アジア主義」と「超国家主義」が相補的な思想

圈であることや、「農本主義」と「超国家主義」が平行な関係であること導いている。